

| 題名 | 作者 | コメント | 評価 |
|-----------------------|------|--|----------------------|
| 奪取 (講談社) | 真保裕一 | 映画「キャッチ・ミー・イフ・ユー・キャン」をみたときに、この偽札作りの本を読んでいた。映画とこの本では時代が30年以上違うから偽造への防御がまるで違うってこともあるけど、映画は案外お気楽っぽい楽しさで、本はさすが日本人、ちいさなことからこつこつとって感じ。何しろ、ミツマタの木を育てるところから始めるんだから。偽札を作る工程が詳しく書かれていて、だけど最後にその通りに作ってもほんとは出来ないよって注釈があった。あれだけで作ろうと思った人がいるなら、それはそれですごい。偽札作りのために、印刷技術やPCやスキナの勉強を徹底的にする。これほどのことが出来るなら、何をしても成功しそうなもんだけど。 | ☆☆☆★ |
| 第三の時効 (集英社) | 横山秀夫 | C a c c oは「半落ち」の主人公と年齢が同じってことにがっかりしてたけど、私はこの作者と同年もしくは一つ下ってことにびっくりした。いやあん、老けすぎ。でも世間って同じに見えるんだろう。わかってるわよ。つーん。で、この本は短編。この中で知っているだけで2編はTVドラマになっている。ひとつは見たので、朽木班長はすっかり渡辺謙になっていた。 | ☆☆☆☆ |
| 顔 <FACE> (徳間書店) | 〃 | 似顔絵を得意とする婦人警官が部署を転々としながら、謎の核心に迫る。男の刑事ものとは異なり、似顔絵描きが主人公なんて面白いと思っていたら、早速TVドラマが始まった。この人の話はよっぽどドラマ向きなんだなあって思って見たら、もっとドラマ向きの話に変えてあった。目撃者の話を聞きながら加害者の似顔絵を描いて推理するっていうみどころが、TVだとただのオカルトチックなものになっていたし、話の辻褄があっていないところもあって、いくらオダギリジョーが可愛いからって、もうTVは見ないことにした。似顔絵描きって目新しいキャラクターが欲しかっただけなのね。こういう話こそ、NHKあたりが地味な役者で地味に作ってほしかったな。 | ☆☆★ オダギリジョーの髪型は変だ |
| 深追い (実業の日本社) | 〃 | 警察の中での色々な立場、職種の警官を主人公にした短編集。横山秀夫を続けて読んで、新聞記者をやっていた著者がよくもこれだけ警察の話ばかり書けるものだと思うです。 | ☆☆☆ |

| | | | |
|-------------------------------|--------------------------------|--|--|
| <p>GO (講談社)</p> | <p>金城一紀</p> | <p>北朝鮮から韓国に籍を移し、朝鮮学校から日本の学校に変わる高校生の恋愛・友情。朝鮮学校の生活が書かれている部分の事実関係を、韓国籍の友達に聞いたら、あの映画は不愉快だったって。映画はちゃんと見てないからなんとも言えないけど。でもその友達も別の友達も北朝鮮籍から韓国籍に変えた理由が少しわかった。</p> | <p>☆☆☆☆</p> |
| <p>ミタライ・カフェ (原書房)</p> | <p>島田荘司</p> | <p>フルカラーの「デジカメ日記」がきれい。デジカメを買ったと言ったら、後学のためにと健ちゃんが貸してくれた本。デジカメってただ撮ればいいのかと思ってたら、いろんなことが出来る分、研究しないとだめなのねー、と今頃感心する私。</p> | |
| <p>ダーク (講談社)</p> | <p>桐野夏生</p> | <p>「顔に降りかかる雨」「天使に見捨てられた夜」など探偵・村野ミロシリーズ。狂気も感じるけど、もっと強くてもう少し頭がよかった筈の主人公が、今回は、父親を恨んで見殺しにしちゃうし、おまけに飼い犬まで投げて殺しちゃって、まるで印象が違う。日本が舞台の出だしは、気分が悪いだけだった。厚さ5cmの本のわりに二日で読めたのは、舞台を海外に移してからはスピードのある展開だったから。でも、破滅型の激しすぎる女の人ばかり出てくると現実味がないし、共感の持ちようがない。</p> | <p>☆ 犬を殺す ただで、 ばってん荒 川</p> |
| <p>生存者、一名 (祥伝社文庫)</p> | <p>歌野晶午</p> | <p>大罪を犯し、組織にだまされて孤島で生活を始めた5人が、次々に殺されていく。題名から誰が残るのかと思うようになって最後にそれがわかる。この題名を使いたいためにそれまでの話を作っていたんだなあ。</p> | <p>☆☆☆</p> |
| <p>わたしたちができるまで (角川文庫)</p> | <p>大島弓子 小椋冬美 岩館真理子</p> | <p>大島弓子が岩館真理子に、吉田戦車が小椋冬美に、吉本ばなな(まだ漢字のころ)が大島弓子に50の質問。それと本人の作品解説。 この時代の漫画家って、私のイメージの漫画家なんだよね。漫画以外のものを売り物にしない、けしてワイドショーのコメンテーターにはならない。岩館真理子なんて、高校生作家としてデビューしているのに、華やかさがまるでなくて嬉しくなる。</p> | <p>☆☆☆☆</p> |

| | | | |
|-----------------------------------|-------------------------------|---|--|
| <p>光の記憶 (VOICE)</p> | <p>高橋克彦 グリー・ ボーネル</p> | <p>2001年の大イベントに出逢うためにキリストはそれ以前に降臨してイギリスにいたらしい。高橋克彦は313回転生して、そのうちの一度はキリストと逢っていたらしい。2026年には性別はなくなっているらしい。ふ〜む。。何か起きると予告するヘンな集団が今もいるけれど、危機感を募らせることでなにをしようと言うんだらう。2001年に対する予告を過ぎてしまった今この本を読むのは悪趣味かもしれないけど、これを前に読んでいてもきつとなにも感じなかったと思う。そういう考え方だから、きっと2001年のイベントの時に私にはキリストが見えなかったし、光の12日間に覚醒をしなかったのか。。高橋克彦って一体どこまで本気で聞いていたんだらう。来週死ぬと言っていたグリーの弟はどうなったんだらう。余命5日と言っていた白い集団の教祖はいまだ元気らしいけど。。</p> | <p>本を読み始めるまでに2ヶ月、読み始めてから1ヶ月かかった</p> |
| <p>夏と花火と 私の死体 (集英社文庫)</p> | <p>乙一</p> | <p>「このミステリーがすごい (このミス)」で「GOTH」が高い評価を得た作家が16歳のときに書いた中篇のデビュー作。女の子の一人称で書かれていて、そのコが殺されても死体の視点で語られていく。とっても若い小説。(誉め言葉よ)</p> | <p>☆☆☆☆ 「おついち」って読むの</p> |
| <p>天帝妖狐 (集英社文庫)</p> | <p>〃</p> | <p>中篇2編。ぞくっとする怖さがたった1行にあたりするけど、ホラーってほどじゃない。犯人探して始まる最初の話も推理するほどじゃない。終わりがたより、とっかかりのほうがうまい人だと思う。</p> | <p>☆☆☆★</p> |
| <p>手紙 (毎日新聞社)</p> | <p>東野圭吾</p> | <p>読み始めたら、どんどん目が冴えて来て、ついに一晩で読破してしまった。主人公の進学費用の捻出のために兄が強盗殺人を犯してしまい、そのことがそれ以降の主人公の人生の節目にのしかかってくる。今度こそ幸せになれると思うと、その度に兄のことが弊害になるというパターンで、主人公に幸せがやってきそうでやってこない帯ドラマのような展開。でも、一気に読みするほど面白かったのかといえば、☆5コはあげられない。これがそうだとは言わないけど、それほど面白くないのに、一気に読んでしまう小説、例えば、「ダーク」「模倣犯」。。一気に読めたというのと、面白かったってのはやっぱり別物だと考えるけど、みなさんはどう思います？読みやすさは評価の対象になります？</p> | <p>☆☆☆★ ドラマになったら兄の役は若乃花がいい。のっそりしてる印象がぴったし！</p> |

| | | | |
|-------------------------------------|--------------|---|---------------------------------------|
| <p>毒笑小説 (集英社文庫)</p> | <p>〃</p> | <p>お笑いの短編。作者を知らずに読んでみると、東野圭吾とは思えない。巻末に京極夏彦との対談で笑いを書くことが好きだと書いてあるから、私が今までこの手の話を読んでいなかっただけなのかも。電車で読んでいたら笑えるところもあったのかも、って程度の笑いだった。読んでいて笑える小説ってすごく難しいよね。</p> | <p>☆☆</p> |
| <p>わたしの グランパ (文芸春秋社)</p> | <p>筒井康隆</p> | <p>これもまた身内が殺人を犯したという設定。刑期を終えたおじいさんが家に戻って来た騒動を中学生の孫娘との関わりを中心に語られていく。刑務所帰りのおじいさんは、一種のスーパーマンで、孫のいじめも解決し、街のやくざともうまく立ち回る。カリスマ性を持ったおじいさんは、殺人を犯していながらも街の人たちに受け入れられている。「手紙」の主人公もこういう家族と知り合いになっていればよかったのにと、まるで違うタイプの話なのに、ごっちゃに思ってしまった。</p> | <p>☆☆☆</p> |
| <p>不安な童話 (祥伝社文庫)</p> | <p>恩田睦</p> | <p>宮部みゆきがどこかで誉めていた気がして、読んでみた。当時、小学生の娘が夢中で見ていたTVドラマ「六番目の小夜子」の原作者だとは知らなかった。</p> | <p>☆☆</p> |
| <p>ブレイブ ストーリー(上) (角川書店)</p> | <p>宮部みゆき</p> | <p>小学生の男の子が両親の離婚をくいとめようと運命を変えるために異世界に飛び込むロールプレイングゲーム的冒険の話。上巻だけで630ページあるし、この本と並行して読んでいるのも主人公が小学生ってこともあって少し息切れ気味。これでまだ下巻もあるなんて、ちょっと長すぎないか？</p> | |
| <p>別冊宝島 (宝島社)</p> | <p>雑誌</p> | <p>「音楽誌が書かないJポップ批評浜田省吾」 表紙から裏表紙まで、まるまる一冊浜省！ 渋谷の「BAR ROAD&SKY」行きが延期になった私を慰めてくれた本。由佳ちゃんも買ったっていうし、次回は三人でこの本を語れるかな？(yukoさんにプレッシャー光線、びびーっ！)</p> | <p>☆☆☆☆☆ ☆ あれっ？ 一個多い？</p> |